

パネリスト（石原義剛 氏）

伊勢湾の入口に非常に素潜りで漁をする海女さんが盛んな島。さらに皆さんお聞きになったかも知れませんが、「寝屋子」という制度。漁師になる子どもたちもひっくるめて子どもたちが中学校をでると寝屋親というのを決めてそこで合宿生活に入るという制度を持っている答志島という島があります。非常に盛んであったこの島でさえ、今いろんな島が持っている苦しみに入っています。その中で何とか島を元気にしようということで、これは先ほどちょっと申し上げた鳥羽市の潮騒クラブの皆さんからのお誘いもありまして私たち海の博物館もお手伝いするという活動を2000年から始めました。そして2005年に島の旅社という任意団体を作ったのです。この5年間かけて何をやったかという、島には宝がある。だから島の宝探しをしようということをさまざまな方法でやりました。その中で例えば皆さんから見たら何でも無いかも知れませんが、潮溜まりというのがあることが分かりました。その島の人たちにとってわからないという状況があったのです。今、この潮溜まりに都会の子どもたちが年間1500～2000人ぐらい来てくれるようになりました。島の人たちのふつうの時の食べ物は“ケ”ですが、晴れの時の食べ物というものがあります。お祭りの時とかお正月とかにちょっと違った昔の料理をお出しになるでしょう。そういうものも一つの宝物と考えました。実は昨日でしたか、谷川さんから大正末か昭和の初め頃でしょうか、この島の古い地図を見せていただいたのですが、その地図の裏側に当時の島のいろんな職業の一覧表が出ていました。（会場に見えるように）以前はこれくらいたくさん職業があって、島の人たちがさまざまな仕事をしていたのだということがわかります。これを見ると愕然とするのは、それがたくさん減ってしまったわけです。私たちは今、島の宝をもう一度探し出してみようということをきつと丹念にやる必要があるのではないのでしょうか。私は博物館屋ですから何でも集めますが、集めるだけではだめで、その集めたものからさっき宮本先生の「何か見えてくるよ」ということを申しあげたのですが、集めて探してそして何か新しいものを探していくというそういう作業が島の住民の皆さんの中から芽生えてくる必要があるだろうと思います。先ほど申しあげた答志島の案内は海女さんと漁師のおかあさんたちがやっています。一度みなさんどうぞおいでください。この島の旅社の女性達とお会いいただいて、いろんな話し合いをさせていただき、島と島のネットワークをもって、今後お互いに手をつないでいきたいと思えます。「我が島の誇り」たぶん、これがキーワードではないかなと思っております。

コーディネーター（谷川正芳 氏）

ありがとうございます。では続きまして森本様お願いできますか。

パネリスト（森本 孝 氏）

「古いものが新しい」逆説的なことばです。実はこれは私のことばではありません。昨日の夜とか先ほどまでいろんなキーワードを考えていたのですが、急遽これに変えました。

先に石原館長が古いものの中に宝がある、とおっしゃいました。古い、時代遅れといったものが、取り扱いの仕方によっては新くなるよ、最新のものになるよという意味で「古いものが新しい」ということです。これは実は宮本常一が語ったことばで、ずいぶん前に宇都宮女子高の講演の中で語られたものです。これを私は島の文化再生のキーワードにしたいと思います。木造船がこの島を育ててきた。木の文化が育ててきた一面があるのです。それを捨ててしまうとこの島が減るだけでなく、いろんなところが関連して減っていきます。木造船というのはもちろん木で作ります。瀬戸内海の場合は宮崎県の油津から積み出された飢肥杉というのが使われていたのです。飢肥杉というのは非常に成長が早い。成長が早いから木が三角形に伸びていって、年輪の幅も大きく板にした場合曲げやすいのです。ということで瀬戸内海中の北前船とか木造船、機帆船もそれを使って作られていたわけです。先ほど私がお見せした直線的な北の方の船は秋田杉とか非常に硬い杉を使い、曲げることは非常に難しいのです。木造船が作られなくなったことで、この島の木造船の技術が失われるだけでなく、実はその杉を育てていた宮崎の飢肥杉さえも滅ぶ運命にあります。二、三年前の台風で飢肥杉はばたばたと倒れているというニュースがありました。要するに技術が失われる、伝統が失われるということは、資源まで失ってしまうことなのです。ですから古い文化であるとか、伝統であるとか、技術というものをこの島の中で探して、現代によみがえさせられるようなことをしたらいいのではないかと思い「古いものが新しい」ということをキーワードにいたしました。

コーディネーター（谷川正芳 氏）

ありがとうございました。引き続いて佐田尾様お願いできますか。

パネリスト（佐田尾信作 氏）

私は「風の人 地の人」というキーワードを。これは自分がものを考えるときの参考ということでもあります。先ほど石原先生のお話をお聞きしたときに、ここにも宮本常一にはっぱを掛けられた犠牲者の人がおられるなど思いました。というのは、五万点を集めろと言われた、と言われましたけれども、同じものでも集めろと。これはいろんな人が佐渡でも、大島でもそう言われて集めた人がいるというのを知っております。同じものでも集めなさいというのです。そんなこんなで、みんなが何万点も例えば民具であり、船具を集めているのです。聞いてみるとだんだん分かってきましたが、人の手を経て作ってきたものは同じ鎌でも鋏でもどんな土地で使うか一つ一つが固有のものであるという意味合いだと思います。手作りの文化とでもいいますか、そういうものがあつたその痕跡を残すには、そういう手法でないといけないということを、身をもって感じたので出会った人にそうやってはっぱをかけたのです。佐渡なんかでも民具を集めてあとは大変だ、なんてこともあつたかと思いますが、佐渡の小木民俗博物館では仏壇とか民間信仰のいろいろなものまで残っております。今の収集方法だと一つのもは一点あればいいということだと思う

のですけれども、そういうところがあると思います。今のキーワードはそうやってそそのかした人もそそのかされた人もいる。それで成り立っているのではないかということをお願いするためのキーワードであります。

コーディネーター（谷川正芳 氏）

ありがとうございました。それでは松島先生お願いします。

パネリスト（松島勇雄 氏）

はい。すみません四文字熟語あまりで「灯台下暗し」四文字熟語ではありません。これ、二つの意味をこめて申しあげております。「灯台下暗し」もうご存知だろうと思うのですが、やはり遠くは見えるかもしれないけれども、近くはおろそかにしている。地域力、皆さんもパネリストの方が言われてきた中に地域にあるものをもう少し「古いものも新しいんだ」とかいう感覚で見直さなければならぬ。我々はもう近くのものを見るのにおそらくサングラスをかけて見え難くなっています。そういうものを少しでも直すためには、こういうふうの外から見ていただいた考え方とかそういうものが必要だということが一つ。もう一つは、目先のことはもちろん大事です。もう少し深めましょうということと、もう少し遠目を見て行こう。灯台のように沿うほう遠くを照らす。ビジョン。その思いをこめて「灯台下暗し」というのを私自身に対する自戒のことと同じですけれども、私のキーワードとさせていただきます。以上です。

コーディネーター（谷川正芳 氏）

ありがとうございました。

4人のパネリストの方々それぞれ前に掲げていただけますでしょうか。

「我が島の誇り」

「古いものが新しい」

「風の人 地の人」

「灯台下暗し」

最後に、4人のパネリストの先生の思いを胸に、今日お集まりの皆さんは「大崎衆」（パネルを見せながら）だということでご承知いただきたいと思います。

実は金原さん（大崎上島郷土史家）に一昨日の夜、電話をかけました。「大崎衆というところの人が集まっていたか教えてください・・・」と。そうすると昔の区割りとは別とし

て、全ての町（中野、原田、東野、沖浦）から、要するに四代官が集まって小早川水軍を守り立てていたと。それが五百年とはいいませんが、それぐらい前に大崎衆として非常に集まっていた。今日、お集まりの皆さん、ぜひ先ほど中学生が20年後といいました。

今日は50年前の話もありました。けれども50年後には、大崎衆がいたけど今もがんばっているよと言っていただかなければと思います。

ということで、コーディネーターが最後をまとめるということなのですが、私の不手際で大幅に時間が延びてしまいましたことを最後にお詫び申しあげまして、マイクの方は司会の方にお返ししたいと思います。

司会（松原恵美 氏）

はい、どうぞ皆さま盛大な拍手をお願いいたします。

それでは講師の皆さまが退場されますので、今一度盛大な拍手でお送りくださいませ。ほんとうに今日はどうもありがとうございました。